

歴史認識と国際政治思想 — 「新しい国際政治学」は必要か? —

A Philosophy of History and the International Relations

— We need a new International Relations, aren't we? —

石井貫太郎
(Kantaro ISHII)

キーワード：政治、国際政治、国際関係

Key Words：Politics, International Politics, International Relations

目次

1. はじめに
2. 歴史認識と歴史哲学
3. 国際政治理論史上における“新しい国際政治学”の意義
4. おわりに

1. はじめに

最近、筆者の近辺で、あたかも自己の専門分野である国際政治理論研究に関する方法論的な課題を暗示するかのようになり、以下に記す二つの出来事があった。

(1) 二つの経験

まず、第一に、筆者の大切な友人の一人で、当時はアメリカの新聞社に勤務し、特派員として日本に在住していたイギリス国籍のジャーナリストが、近年のアメリカにおける以下のような噂話を教えてくれたことである。すなわち、先のニューヨーク貿易センタービルへのテロ事件（いわゆる9・11事件）以後、アメリカ、特にニューヨークなどの都市部では、「September 10th（9月11日以前?）」という言葉が流行するようになったそうである。これは、9・11事件以前の時代における古い(?)もの見方や考え方に対して、いわばそれを揶揄嘲笑した蔑視の念を込めて使用する批判的な概念であるらしい。どうやらアメリカでは、このことに代表されるように、あの事件以後、「時代や世界が変わった・・・」という認識があるようである。

ちなみに、筆者の彼に対する回答は、以下のようなものであった。すなわち、「アメリカ人か

ら見ると変わったように見えても、イスラム文化圏の人々からは変わっていないと見えるかも知れませんよ。むしろ彼らにとっては、これまでの時代の方が異常で、やっと正常になり始めたと感じている可能性だってあるのではないですか・・・？」と。彼はその後、アメリカの新聞社を退職し、フランスの新聞社の記者へと転職してオーストラリアのメルボルン駐在員となり、現在に至っている。

要するに、筆者が彼に聞いたかったのは、以下のようなことであった。すなわち、われわれは今まで欧米諸国、特に、西洋文明世界またはキリスト教文明世界の情報によく触れる努力をしてきたが、それ以外の世界の様々な地域、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどに関する情報によく触れるようとする努力が足りなかったのではないか、そして、仮にそのような努力を蓄積していけば、現代の世界には「変わったところ」と「変わらないところ」の双方が存在している事実を認識できるのではないかという疑問であった。

第二に、かねてより筆者が心から尊敬している歴史学者で、わが国における近代および現代の西洋史ならびに国際関係史研究の大家として名高いある教授が、ご退職日の迫ったある日の夜、電話で筆者に対して、「これまで世界のさまざまな現象について多くの予測や理解をしてきたが、あの事件（9・11事件）以後の世の中についてはまったく分からないんです。こうなってくると、私もそろそろ引退の時期だと感じるよ・・・」と（少し大げさにいえば）信仰告白とも取れるお言葉を述べられたことである。

ちなみに、筆者の同教授に対する回答は、以下のようなものであった。すなわち、「しかし先生、先生のご専門である西洋史の視点から見れば分からないことでも、先生ほどの方なら、これから少しばかりイスラム史について勉強されれば、もしかするとまた分かるようになるかも知れませんよ。どうかそんな弱気なことをおっしゃらずに、ますますお元気で研究にご活躍ください・・・」と。先生はその後、従来の西洋史研究・現代史研究から、新たに比較文明論のご研究へとその駒を発展的に進められ、今日に至っている。

要するに、筆者が先生に申し上げたかったのは、以下のようなことであった。すなわち、われわれは、やはり先の例と同様にして、欧米諸国、特に西洋文明世界またはキリスト教文明世界の論理をよく研究しようと努力をしてきたが、それ以外の世界の様々な地域、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの国家や社会などにおける論理を研究しようとする努力が足りなかったのではないか、そして、仮にそのような努力を遂行していけば、これまで常識と考えられてきたことの非常識性や、逆に、これまで非常識と考えられてきたことの常識性などが発見できるようになるのではないかということであった。

（2）世界は本当に変わったのか？

ところで、果たして本当に時代や世界は変わったのであろうか？世評一般でいわれているように、9・11以前とそれ以後の時代や世界を区別するというのであれば、その社会的な構造や現象の動態傾向において、9・11事件以後とそれ以前との間に、何か決定的な変化や転換が存

在していなければならないであろう。そして、もし基本的な変化があったのであれば、最近流行の「新しい国際政治学」なるものは、いうまでもなく現代の国際政治学や国際関係論における重要な学術史的な意義をもつことになる。しかし、もしも基本的な変化がなかったのであれば、それは果たして、その必要性和存在意義自体を問われる議論として位置付けられることになるであろう。

以下、本論文では、果たして9・11事件以後の現代の国際政治現象が、これまでに蓄積されてきた「従来の国際政治学(?)」によって説明できないものであるのか否かという視点を中心として、いわば現代史に対する歴史認識(Cognition of History)あるいは歴史哲学(Philosophy of History)の検討という課題を念頭に置きつつ、「新しい国際政治学」なるものの必要性和、その論理的な妥当性について若干の考察をしていきたいと思う。したがって、本稿の議論は、その前提として「新しい国際政治学」が必要であるという認識を所与としたものではなく、そのような前提そのものが果たして成立するか否かを論ずるというメタファーの議論であることをあらかじめことわっておきたい。

2. 歴史認識と歴史哲学

ところで、一般に社会科学研究者、特に、歴史学者や政治学者、または国際関係論者にとって、歴史の推移をどのようなものとしてみるかという認識の姿勢＝歴史認識または歴史哲学は、決定的に重要な意義をもつ要素である。⁽¹⁾ いにしえのカント(Immanuel Kant)、ヘーゲル(G. W. F. Hegel)、ランケ(Leopold von Ranke)、ブルクハルト(Jacob Bruckhardt)など、近代および現代の歴史上に足跡を残す碩学の偉人たちを引き合いに出すまでもなく、このような議論は、社会科学の根幹をなす問題意識であり続けてきたといえる。

たとえば、歴史を決定論的な事実の推移としてとらえるならば、そこではあらゆる事物の時間的かつ空間的な進行が最終的に到達する何らかの場所が存在し、すべての歴史学の研究者たちは、そのような到達点があるのか、それがどこにあるのか、そこに到達する過程はどのようなもので、一体いつ人類はそこに到達するのかといった問題に取り組むことになってしまう。こうした歴史認識における方法論の典型はマルクス主義的歴史観というものであり、そこでは、すべての人類社会は、いずれ資本主義の矛盾によって社会主義や共産主義的な社会へ到達すると予言されていた。しかし、むしろ歴史を非決定論的な事実の推移としてとらえるならば、そもそもそうした到達点があるのかないのか、あるとすればそれにはどのような種類があるのか、果たして人類はその中のどこへ到達すべきなのか、そこに至る過程や政策はいかにあるべきなのかなどなど、より広く多くの発展的な課題が提示されることになるのである。

いうまでもなく、国際政治や国際関係の推移をとらえる作業を遂行する場合にも、こうした歴史認識または歴史哲学は、研究方法論上において決定的に重要な要素である。この節では、こうした歴史認識や歴史哲学というものが、ヨーロッパにおける社会思想史の文脈から生まれ

たものであることを前提として、それが、ここで紹介するブルクハルトの登場を境に転換した事実を見ていきたいと思う。

なお、日本では「歴史認識」といえば、そのまま戦前日本のアジアに対する政策の是非を問う議論と直結するイメージがあるため、このような非常に特殊な事情を有する用法との誤解を避けるために、ここではつとめて、できる限り「歴史哲学」という言葉を用いていきたいと思う。ちなみに、日本におけるこの「歴史認識」という用語の用法に関するこうした問題は、現代日本の全社会科学者が早期の解決を目指して真摯に取り組むべき課題である。

(1) ブルクハルト以前の歴史哲学

ところで、先に指摘したブルクハルトの歴史哲学が登場する以前の時代において、ヨーロッパの哲学者や歴史家たちが有していた歴史哲学は、多かれ少なかれ、キリスト教でいうところの終末論的な歴史観に根ざしたものであったと考えられる。⁽²⁾ たたとえば、ヘーゲルの歴史哲学は、このようなキリスト教の終末論的な歴史哲学をできる限り一般の人々にも分かり易い形で再編することを念頭に置きながら、歴史はある一定の目標を目指して発展するものであるという立場をとっていた。そして、そこでは多分に、本人が好むと好まざるとにかかわらず一つの終着駅に向かって展開される歴史の動態＝終末論的な歴史哲学からの影響が見られるとともに、いわゆる「世界史 (World History)」はそのまま「ヨーロッパ史 (European History)」を意味するものであり、また、その多くは政治や国家などの公式の社会活動を重視した政治史 (Political History) としての歴史観であったと考えられる。すなわち、ヨーロッパ以外のアジアや東洋などの歴史的事実の蓄積や、政治以外の宗教や文化が果たす歴史における役割を軽視・無視する傾向が見られたといえよう。そして、こうした傾向は、ランケなど、ヘーゲルに続く哲学者や歴史家たちの歴史認識にも見られるものであったと考えられる。

このように、ブルクハルト以前の歴史哲学は、いずれも歴史認識におけるヨーロッパ重視、政治活動や国家活動の重視などの特徴を有しており、そこに、アジアや東洋などの非ヨーロッパ世界を含む全世界史的な視野や、政治や国家の活動に限定されず、より広く文化や宗教などの非政治的な人間の活動に対する視野が設定されることは稀少であったといわねばならない。繰り返すが、そこでは、あくまでも世界史はそのままヨーロッパ史であり、政治史であり、それ以外の地域や分野の歴史を論ずる際にも、あくまでもヨーロッパ史や政治史の文脈から論じられることが多く、これを非常識や例外的な事物の時間的推移としてとらえる傾向が強かったのである。すなわち、ここに世界の他の地域に対してヨーロッパだけが近代的な社会を作り上げたという自負と驕りの意識が存在していたことは否定できない。

(2) ブルクハルトの歴史哲学

しかし、このような、従来のヨーロッパにおける歴史家や哲学者たちにおける歴史哲学の傾向に対して、ブルクハルトは独自の歴史哲学を展開した。⁽³⁾ すなわち、彼は、彼以前の多くの

歴史哲学、すなわち、これまでの神学的・形而上学的な前提をもった歴史哲学、あるいはキリスト教的な終末論的な歴史認識などの諸研究成果を、とりあえず一旦リセットした上で、純粹に人間本位の立場から歴史哲学を構築しようと試みた哲学者であった。そこでは、従来のように、歴史上の出来事をタテの時系列のみからとらえることをせず、より横断的にとらえる視点を設定しつつ、歴史の出来事が個別的で一回かぎりのものではなく、むしろ反復する恒常的なものであり、そして、他の出来事と比較して類型可能なものであるととらえる試みが展開されている。また、人間の精神的な要素なくして歴史は起こらないという前提から、彼は歴史を精神的な連続体としてとらえたのである。そして、この連続性の危機=たとえば革命なども、彼によれば単に加速度的な変化に過ぎず、相対的な速度の問題として認知されることになったのであった。すなわち、革命とは、歴史的な意味における巨大な転換事というよりも、むしろ単に、平素のスピードよりも早く歴史が進展する時期というだけの意味をもつ出来事にすぎないというとらえ方である。

もちろん、ブルクハルト自身もまた、ヨーロッパ人の哲学者・歴史家としての歴史認識を行っていたのであるから、彼の歴史哲学もまた、ヨーロッパ中心史観としての域を超越したものであったとは言い難い。そして、このような傾向は、実には、以下に見るような現代国際政治学のマクロ理論の歴史認識にも妥当するものであると考えられるのである。ただし、ブルクハルトによるこうした新しい歴史哲学上のスタンスの提示は、後のフランスを中心としたアナール学派や社会史学派の歴史学や、さらには、現代の国際政治学や国際関係論、特に、地域研究や比較文明論などの領域に対して、はかり知れない影響を与えることになったと考えられるのである。

3. 国際政治理論史上における「新しい国際政治学」の意義

(1) 国際政治理論に内包する西欧中心史観と政治史重視の論理

かつて、1970年代の後期から80年代の初頭にかけて、特にアメリカを中心として、覇権理論(Hegemonic Stability Theory)や長波理論(Long Cycle Theory)などの現代国際政治学におけるマクロ理論が登場する以前の時代においては、国際政治学の理論的研究成果というものは、ミクロ理論における政策決定理論(Decision-Making Theory)と、マクロ理論における勢力均衡理論(Balance of Power Theory)および国際統合理論(International Integration Theory)が主流であった。⁽⁴⁾ここで勢力均衡論とは、複数の諸国家によって構成される国際関係が各国の国力の均衡によって秩序付けられるという理論であり、また、国際統合理論とは、諸国家間の国境を超えた協調と協力が当該地域の国際関係の安定と発展をもたらすという理論であった。そして、これらの理論は、いずれも18～19世紀のヨーロッパ諸国家間におけるバランス・オブ・パワーを通じた国際関係の推移(Concert of Europe)や、20世紀中期～後半におけるヨーロッパ統合(いわゆる現代のEU統合)の進展を念頭に置いた理論であったといえる。

しかし、米ソの冷戦体制から米国の覇権体制へと時代が推移することにもなると、国際政

治学や国際関係論の研究対象は、むしろ全世界を支配する覇権国の力の盛衰をめぐる現象変化の論理を解明することに向けられるようになったのである。上記の覇権理論や長波理論は、いずれもこうした覇権国であるアメリカという国の世界を支配する国力が、いかなる要素によって盛衰するのかを論じた理論であったといえよう。

このように、特に欧米で発展してきた国際政治学のマクロ理論における研究対象は、やはりヨーロッパ、または、より広くいって欧米諸国を念頭に置いた議論であったことは否定できないと考えられる。また、これらの理論は、いずれも国際関係における政治（軍事安全保障を含む）や国家の活動を重視する傾向を有しているといえる。いわゆる現実主義＝リアリズム的な視点である。そして、こうした傾向を歴史的な言葉で換言すれば、いわゆるブルクハルト流の文化史よりも、むしろランケ流の政治史の歴史認識に近い研究成果であったといういい方ができるのである。したがって、現代の国際政治理論の特徴は、それが政治学の一分野としての学問である以上はむしろ当然のこととも考えられるが、しかし、それはあくまでもヨーロッパ中心（欧米中心）史観であり、また同時に、政治史中心史観に根ざした歴史哲学を根底に置いたものであることは否定できないであろう。

（2）国際政治学と国際関係論

もちろん、現代国際政治学の理論の中には、こうした傾向に反する例外も存在している。それは、このような欧米を中心に発展してきた国際政治学の理論とは異なり、中南米の学者たちによって提示された従属論（Dependency Theory）であり、それを論理的に発展させた世界システム論（World System Theory）などである。ここでは、欧米流の国際政治学における政治史重視の傾向に対して、経済史や文化史を重視する「社会史」的な視点や、欧米中心史観に対して、非ヨーロッパ地域、非欧米地域を含む世界システム全体に関する全体史・世界史的な視点が見られることは注目に値するといえよう。さらにいえば、国際政治学、国際経済学、国際社会学など、政治学以外の他の学問分野における研究成果や研究手法を包含する新しい学問としての「国際関係論（International Relations）」の動向についても、こうした傾向が強く見られるのである。

以上に見てきたように、特に欧米を中心として発展してきた現代のマクロ国際政治理論における歴史認識は、その多くの面において、先に紹介したブルクハルト以前の時代におけるヨーロッパの哲学者や歴史家たち（あるいは彼自身も含めた？）の歴史哲学に近い特徴を有していると思われる。しかし、そのような欧米中心のおよび政治重視・国家重視的な特徴は、前段で述べたような「社会史」からの挑戦と批判を刺激として受け入れながら、今日では、国際政治学、国際経済学、国際社会学、国際文化学など、より広く多くの種類の学問を包括した新しい学問体系としての「国際関係論」において克服され始めているように思われる。ここでは、ブルクハルトの全体史のおよび文化史的な歴史認識の姿勢を受け継ぐ傾向を見ることができると同時に、また、長い間アジアや東洋を無視してきたヨーロッパの歴史哲学に反して、アジア、

アフリカ、ラテンアメリカなど、世界の様々な国や地域に関するグローバルな議論がなされており、そこに、ブルクハルト以来の本当の意味での「世界史」を体系化する試みが行なわれることが期待できるように感じられるのである。

4. おわりに

本稿では、ヨーロッパの哲学者や歴史家たちにおける歴史認識の特徴を再考しつつ、ブルクハルト以前のそれが、ヨーロッパ中心史観、または、いわゆる欧米中心史観に基づいた歴史哲学としての傾向を有しており、さらに、ブルクハルトの歴史哲学が登場して以後、その傾向に批判的な議論が喚起されたことなどを概観しながら、それらの知見をもとに、現代の国際政治学におけるマクロ理論がどのような歴史認識を行なっているのかを考察することに応用し、いわゆる「新しい国際政治学」の存在意義について考えてきた。最初に、ブルクハルト以前のヨーロッパの歴史哲学における特徴をまとめ、次に、いわゆるブルクハルトの歴史哲学を要約した後、最後に、覇権理論・長波理論・世界システム論など、現代の国際政治学におけるマクロ理論の背景にある歴史哲学について論じてきたが、その過程で明らかになったことを前提として検討すれば、その結果を以下のような結論にまとめることができるであろう。

第一に、ヨーロッパの歴史哲学史における傾向として、いわゆるブルクハルト以前のヘーゲルやカントの歴史認識には、多かれ少なかれキリスト教主義に基づく終末論的な認識が見られた。しかし、彼らに続くブルクハルト以降の歴史認識には、そうした傾向を超えて、より世界史的な視野を構築しようとする努力が見られた。

第二に、現代のマクロ国際政治理論の主流派であるリアリズムの背景にある歴史哲学には、多分にブルクハルト以前の欧米中心史観の傾向が見られた。しかし、これ以外の制度主義、構造主義などの理論や、より広く国際政治学を含む学問としての国際関係論の構成分野である地域研究や比較文明論などの業績においては、こうした傾向を超えようとする努力が見られた。

第三に、いわゆる欧米中心史観を踏襲すれば、今日の世界は変わったと考えることも可能であり、そこに、「新しい国際政治学」の必要性を感じ取ることができると思われる。

第四に、欧米中心史観を超えて、全世界的な歴史観を追究するスタンスに立てば、今日の世界はその根底の部分では変化したと考えられる部分は限定的なものとなり、そこでは、従来の国際政治学の方法論の延長線上に、これまで歴史学者、政治学者、国際関係論者たちが周辺的な要素としてしか取り扱ってこなかった、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの発展途上国に関する地域研究、または、イスラム文化圏や儒教文化圏など、非キリスト教文化圏に関する比較文明論的な研究を遂行・蓄積していくことを通じて、現代世界の論理をより深く広く解明できることになる。すなわち、「新しい国際政治学」が活躍する場所は、その分だけ、より制限された領域に限られてしまうということになる。

しかしながら、いうまでもなく、現代の時代状況がこのいずれの歴史認識・歴史哲学に妥当であるのかを判定することは、今後、おそらく10年～20年の歴史的経過を待つ必要がある。な

ぜなら、歴史上の出来事の意義を歴史的な視点から判定するためには、その当該事実が「歴史的事実」になる必要があるからである。

【注釈】

- (1) 「新しい国際政治学」については、特にアメリカ流の議論において顕著に見られる傾向である。そのサーベイについては、坂本正弘『新しい国際関係論』（有斐閣、1997年）、小林誠・遠藤誠治（編）『グローバル・ポリティクス』（有信堂高文社、2000年）、吉川直人・野口和彦（編）『国際関係理論』（劉草書房、2006年）などに詳しい。また、歴史認識や歴史哲学の意義についての検討は、石井貫太郎（編）『国際関係論へのアプローチ』（ミネルヴァ書房、1999年）の第5章「歴史学と国際関係」などの文献参照。
- (2) ブルクハルト以前の歴史哲学における代表的な論者は、やはりヘーゲルとその源流としてのカントであろう。榎本康男『カントとヘーゲルの歴史哲学・歴史の中での自由（関西学院大学研究業書）』（関西学院大学出版会、2000年）は、近年のわが国における研究成果として定評のある文献である。他に、原典としては、G・W・F・ヘーゲル（長谷川宏訳）『歴史哲学講義（上・下）（ワイド版岩波文庫）』（岩波書店、2003年）などを参照せよ。また、キリスト教的終末論、ヨーロッパ中心史観、政治史中心思考の大家としては、やはり西洋史や国際関係史の父と目されるランケの業績があげられる。たとえば、レオポルド・フォン・ランケ（村岡哲訳）『世界史の流れ・ヨーロッパの近現代を考える（ちくま学芸文庫）』（筑摩書房、1998年）などを参照せよ。
- (3) ブルクハルトの歴史哲学については、J・ブルクハルト（新井靖一訳）『コンスタンティヌス大帝の時代・衰微する古典世界からキリスト教中世へ』（筑摩書房、2003年）、J・ブルクハルト（新井靖一訳）『ブルクハルト文化史講演集』（筑摩書房、2000年）などの文献を参照せよ。
- (4) 現代の国際政治学・国際関係論のマクロ理論については、石井貫太郎『現代国際政治理論（増補改訂版）』（ミネルヴァ書房、2002年）、石井貫太郎（編）『国際関係論へのアプローチ』（ミネルヴァ書房、1999年）の第1章「政治学と国際関係」などを参照せよ。他に、1970年代後半から80年代にかけての代表的な業績の原典としては、R. Gilpin, *War and Change in World Politics*, Princeton University Press, 1981などを参照せよ。